

1. 評価結果概要表

作成日 平成 21年10月5日

【評価実施概要】

事業所番号	0172902009		
法人名	有限会社和の里		
事業所名	グループホーム和の里		
所在地	〒078-8322 旭川市神楽岡12条3丁目1番16号 (電話) 0166-66-4888		
評価機関名	社会福祉法人北海道社会福祉協議会		
所在地	札幌市中央区北2条西7丁目1番地		
訪問調査日	平成21年8月26日	評価確定日	平成21年10月5日

【情報提供票より】 (平成21年 8月 1日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成 17年 2月 1日
ユニット数	2 ユニット
職員数	17人
利用定員数計	15人
常勤12人, 非常勤5人, 常勤換算13.4人	

(2) 建物概要

建物構造	木造 造り
	2階建ての 1~2階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	28,000 円	その他の経費(月額)	16,000~24,000 円	
敷金	有(円)	無		
保証金の有無(入居一時金含む)	有(円)	有りの場合償却の有無	有 / 無	
食材料費	朝食	円	昼食	円
	夕食	円	おやつ	円
	または1日当たり		1,200 円	

(4) 利用者の概要 (8月 26日現在)

利用者人数	14名	男性	2名	女性	12名
要介護1	3名	要介護2	5名		
要介護3	3名	要介護4	2名		
要介護5	1名	要支援2	0名		
年齢	平均 83.9歳	最低	66歳	最高	96歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	緑が丘クリニック、村上内科小児科医院、旭川南病院
---------	--------------------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

当事業所は、JR神楽岡駅やバス停から徒歩3分ほどの住宅街に立地している。利用者は、隣接した菜園での収穫や花作り、近隣住民と挨拶を交わしながらの散歩を行っている。職員は、利用者がその人らしく生きることを支援している。施設長は認知症キャラバンメイトとして啓蒙活動をし、ホーム長は「お年寄りに学んで、お年寄りにかえす」というコンセプトを大切に、職員と共に日々のケアサービスに努めている。

【重点項目への取組状況】

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	前回評価での改善課題は、すでに改善されていたり、近々改善される予定のもの、あるいは、引き続き検討中もの、いずれの課題も、前向きに取り組まれている。今後も改善計画シートの活用により、どのような経過でサービスの質の確保や向上が出来たか確認できる取り組みを期待する。
重点項目②	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	全職員に自己評価を配布し、職員が記入した内容を管理者がまとめている。ただ、評価をする過程から抽出された課題について改善計画を立て、サービスの質の確保や向上につながる取り組みには至っていない。今後は評価を活かし全職員でサービス内容についての気付きや疑問などを話し合い、改善への取り組みが実践される事を期待する。
重点項目③	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)
	運営推進会議は利用者、家族、町内会代表、民生委員を構成員とし、2ヶ月に1度定期的に開催している。会議では、活動報告や制度説明さらには、意見交換を行い、事業所の運営に活かしている。現在、地域包括支援センターへ、運営推進会議への参加協力依頼の働きかけをしている。
重点項目④	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)
	毎月発行している広報誌「和の里たより」には多彩な写真の掲載や、暮らしぶりを記載し、家族からも好評を得ている。職員は日ごろから家族との交流を図り、家族が気軽に意見や要望等を伝えられるような雰囲気づくりに努めている。
重点項目④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	職員は地域に根ざす大切さを理解しており、地元になじむ生活づくりに努めている。町内主催の行事に参加したり、利用者と一緒に近くを散歩する時などは積極的に声かけをするなど、地域住民と顔なじみになれるように心がけている。また、町内婦人部のボランティア訪問も定着してきている。

2. 評価結果（詳細）

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念の共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	理念は「自分のことは自分で」という分かりやすい内容で、独自に作りあげている。事業所では近々理念についての検討会を開催し、地域密着型としての意識付けができる文言の追記を予定している。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	事業所内の要所に理念を掲示しており、全体会議や各ユニット会議において、管理者から内容についての説明をしている。職員は、日々理念を意識し、実践に向けて取り組んでいる。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	職員は地域に根ざす大切さを理解しており、地元となじむ生活作りに努めている。町内主催の行事に参加したり、利用者と一緒に近くを散策する時などは積極的に声かけするなど、地域住民と顔なじみになれるように心がけている。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	評価の意義や目的は職員全員が理解しており、今回は全職員に自己評価表を配布し記入したものを、管理者がまとめている。しかし、評価の過程から抽出された課題について改善計画を立て、サービスの質の確保や向上につなげる取り組みまでには至っていない。	○	自己評価をすることにより、サービス内容についての気付きや疑問、危機管理や予測、今後の改善への取り組みに利用するなど、具体案の検討を期待する。

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は利用者、家族、町内会代表、民生委員を構成員とし、2ヶ月に1度定期的に開催している。会議では、活動報告や制度説明、さらには、意見交換も行い事業所の運営に活かしている。現在、地域包括支援センター職員へ、会議への参加依頼の声かけを行っている。		
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	行政へ疑問点について問い合わせたり、市主催の研修会にも参加している。地域包括支援センターへ、運営推進会議への協力依頼の働きかけもしている。また、施設長はキャラバンメイトとして講演開催や啓発活動も実践している。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	毎月発行している広報誌「和の里たより」には多彩な写真の掲載や、暮らしぶりを記載し、家族からも好評を得ている。職員は家族の訪問時に日常の様子を詳しく伝えている。毎月請求書や金銭出納帳、受診の様子も記載し書面に於て渡している。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	職員は日ごろから家族との交流を図り、家族が気軽に意見・要望等を伝えられるような雰囲気づくりに努めている。家族の意見・要望は直ちに検討し、希望に添えるようにしている。しかし、家族からの問題提起については、対応が不十分な面が見られる。	○	家族会や運営推進会議での家族からの貴重な意見は真摯に捉え、利用者の為に課題については職員全体で検討し、サービスの質の向上を目指す取り組みを期待する。
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	職員の離職は少なく、定着率が高くなっている。ユニット間での職員異動は行っているが、生活上での交流を日々行っている事からなじみの関係ができており、利用者のダメージは少ない。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者は人材育成の重要性を認識しており、研修を計画し、機会あるごとに職員は参加している。職員一人ひとりの知識や経験に応じた外部研修にも交替で参加し、参加後も会議等で職員が報告し、共有している。市内のグループホーム研究会に加入する事で、情報交換も行っている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域にある他のグループホームと定期的に交流の機会を持ち、情報交換を行っている。今後、職員が他の事業所を訪問することについても、検討している。市内では徐々にキャラバンメイトの活動が進んでおり、資格を持つ管理者は講演など広報啓発活動にも協力している。		
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気に徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	事前に利用者宅を訪問して利用者や家族と面談し、その後事業所に見学に来てもらい、職員と顔なじみになるよう手順をふんで事業所の雰囲気に慣れてもらえるよう努めている。利用開始の決定についても、家族等と職員と一緒に検討している。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	利用者一人ひとりの経験や得意なことを見きわめ、活躍できる場面づくりの支援を行っている。また、利用者から生活の知恵や料理の味付けを教わったりするなど、共に支え合う関係を築いている。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	センター方式の一部活用で、利用開始時に利用者の生活歴等や心身の状況の情報を収集している。利用開始後も担当職員は家族の意見や、日々の暮らしの中から本人の希望、意向の把握に努めている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	介護計画書は管理者と職員が話し合いながら作成し、ケアに反映させている。しかし、介護計画の目標やケア内容に対し連動して記載する書式になっていないため、記録から評価の達成状況についての把握が難しくなっている。	○	利用者の生活目標に応じた対応が実践されているかについての記録は、評価や検討の場面で重要な要素となる。記録については管理者も今後の検討課題と捉えており、介護計画書の短期目標に連動した日常の記録が記載出来るよう、取り組みを期待する。
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	基本的に6ヶ月に1度、介護計画の見直しを行っている。全体会議や各ユニット会議で、経過記録から評価を行い検討しており、その過程で、利用者の状態変化に応じて見直している。また、介護計画作成時には家族に直接説明し、確認後に同意のサインをもらっている。		
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	通院時の送迎や理美容院への付き添い、必要物品の買出しなど、利用者の希望に応じた柔軟な支援をしている。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	職員は利用者の希望する医療機関への通院に同行し、状態の報告、聞き取りを行ない家族にも報告している。また、事業所には医療機関による訪問診療が受けられるなど、適切な医療を受けられる支援を行っている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	重要事項説明書に重度化や終末期に向けた指針を記載しており、家族と方針を共有している。また、関係医療機関とも連携を取っており、今後予想される重度化・終末期への対応を検討している。	○	重度化や終末期に際してのケアのあり方は、事業所を中心にできるだけ早い時期から本人、家族、医師等で対応の確認が必要である。事業所が対応できる最大の支援の具体的方策について書式にまとめ、職員の共有方法など早い時期の検討が望まれる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	職員は、利用者の誇りや自尊心を損ねることのないような声かけや対応を心がけている。また、写真の掲載や名前の表示、個人情報の管理についても、プライバシー保護のための手続きを行っている。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な一日の流れはあるが強制することなく、職員は一人ひとりを尊重し、体調や生活歴を大切に、その人らしい生活となるよう支援している。利用者と職員が共に過ごす時間を作り、コミュニケーションを大切にしている。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	毎日、利用者の好みや希望を取り入れながら献立を決めている。食材の買出しや調理、後片付けなどを一緒に行うこともある。事業所内で収穫した野菜を出すなど、食事が楽しみの一つとなる支援を行っている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	週に2回は必ず入浴できるよう曜日を定め、支援している。現在は利用者の入浴拒否もなく、生活の中で楽しみの一つとなっている。必要に応じてシャワー浴や清拭も、さりげない声かけで行っている。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	食事の準備や後片付け、掃除、漬物作り、買い物、菜園作り、絵画、ぬり絵など、生活の中で趣味や役割を持てるよう支援している。利用者の能力を引き出す試みにも、力を入れている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	買い物や散歩、花壇作り、畑仕事など、利用者の希望に応じた外出支援を行っている。管理者は今後も、より多くの外出機会を検討している。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	全職員が鍵をかけることの弊害を十分理解しており、日中は施錠していない。利用者が外出する様子が見られる時はさりげなく声かけし、利用者の安全面に配慮しながら一緒に出かけるようにしている。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	年2回、消防署の協力で避難訓練を行っている。職員は、救急救命講習等を順番に受講している。また、運営推進会議を通して緊急時に地域からも協力が得られるような関係作りもできている。		
(5) その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者の食事、水分摂取量を個別に記録しており、職員は情報を共有し体調管理を行っている。食事制限や病状による食事管理にも対応している。栄養士に食事メニューの点検依頼を行い、年間を通じて確認している。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1) 居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間は明るく開放的で、ソファや椅子を多く設置し、利用者は思い思いの場所で過ごせる空間となっている。広いベランダや談話室、外にはテラスや花壇があり、利用者にとって快適な居場所となるよう配慮している。光、音、温度、湿度等は適宜調節している。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	各居室は利用者によって使いやすいように家具やベット、仏壇が持ち込まれ、本人が安心して暮らせるような工夫をしている。以前の生活とできるだけ変わる事がなく、精神的負担を軽減するような配慮をしている。		

※ は、重点項目。